

# 剣道の試合の場における

## 技術分析に現われた体制理論 (その二)

福田 明 正

### 1. 緒 言

前回において剣道試合技術分析を、打突部位と打突本数の関係から考察し、それらの関係は、小学校、中学校、高等学校の低段位者の不安定

表 1

大会名	期 日	場 所
第12回中国五大学学生大会	昭 36.11.10	山 口 大 学
第3回教職員剣道大会	37. 2.11	大阪中央体育館
第10回全国都道府県対抗剣道大会	37. 5. 3	大阪中央体育館
第9回全国高等学校剣道大会島根予選大会	37. 6.17	島 根 大 東 町
第13回島根県中学校剣道大会	37. 6.18	島 根 県 大 田 市
松江市中学校剣道大会	37.11.19	松 江 市
第6回中国四国学生剣道大会	37. 5.20	鳥 取 大 学
第9回島根県職域対抗剣道大会	37. 6.24	島 根 東 出 雲 町
第17回国体島根予選大会	37. 8.26 27	松 江 市
第9回中国五県警察剣道大会	37. 9. 9	出 雲 市 体 育 館
第6回島根県東西対抗剣道大会	37.10.28	浜 田 市
島根県警察剣道大会	37.10.31	松 江 市
島根大学鳥取大学対抗剣道大会	37.11. 3	鳥 取 大 学
第13回中国五大学学生剣道大会	37.11.16	岡 山 大 学
第9回中国五県剣道大会	37.11.23	島 根 大 社 町
第4回全国教職員剣道大会	38. 2. 3	東京中央体育館
島根県高校新人剣道大会	38. 2.10	松江農林高等学校
島根県総合高等学校体育大会	38. 6. 7	松江農林高等学校
第14回島根県中学校剣道大会	38. 7.23	島 根 大 社 町

性から高段位者になるにつれて、安定性の方向を持って来ること、及び面打突を最高本数として、小手、胴と各各半数宛の関係で低下して来ること、更に個人試合と団体試合の相関に就いても、体制崩壊の相関が全く一致していることを考察した。尚之等を総合して考えたとき、剣道試合に於ては自己修練の訓練が直ちに団体試合の基礎として発展してゆく体制理論も考えられた。

今回は打突の技術内容を分析して更にそれらの諸事項を究明するとともに、学校剣道指導内容についても一考察を進めたい。

表 2 出場者年令別、段級別調 (延数)

	段外	初段	二段	三段	四段	五段	六段	七段	計
10~15	400	20							420
16~20		200	157	182	128				667
21~25		170	182	240	170	30			792
26~30				20	135	450	30		635
31~35				10	100	120	100	5	335
36~40					100	250	350	2	702
41~45						100	70	70	240
46~50						20	25	9	54
51~55						10	10	4	24
56~60							8		8
計	400	390	339	452	633	980	593	90	3,877

### 2. 調査資料と調査方法

表1, 2, にある通り試合は中学校、高等学校、大学と更に一般に区分して段外から四、五、六段を中心に七段までの延人数3,877人、16大会2,668試合、打突総数3,800本について、考察した。

記録は表3の通りの記録用紙の方式に基づいて集計した。記録用紙は、前回のものを基にし

剣道の試合の場における技術分析に現れた体制理論 (その2)

表 3

○ ○ 大 学	順	1				2				3				4				5				技術内容 トビ込② 引② 抜② スリ上② 返② 飛込(コ) 出(コ) 押(コ) 抜④ 返④ 引④ トビ込④					
	氏名 或は 段級	◎ 2段 山中 20才				3段 川上 21才				◎ 3段 中 21才				4段 上田 20才				◎ 5段 西 22才									
	得点順	1	2	3	延	延	1	2	3	延	延	1	2	3	延	延	1	2	3	延	延		1	2	3	延	延
	技術種類	飛込		返			出					返					スリ上						飛込	出			
	反則						コ					ト											メ	ゴ			
○ ○ 大 学	技術種類		抜				抜										飛込	飛込									
	反則						ト										メ	ト									
	氏名 或は 段級	初段	山				3段	山	下			2段	下	川			◎ 4段	中	川			5段	石	田			

勝敗	類型	内容	例	記号
◎	1	1本先取勝	中	○
◎	2	2本ストレート勝	西	○○
◎	A		山中	○×○
⊗	A'		山	×○×
◎	B		中川	×○○
⊗	B'		上田	○××

○ 勝小星 × 負小星 ◎ 勝者 ⊗ 敗者

表 4 学校剣道指導内容

し か け わ ざ	払いわざ	払い面, 払い小手, 払い胴, 払い突
	出ばなわざ	出ばな面, 出ばな小手
	引きわざ	引き面, 引き胴, 引き小手
	二・三段わざ	小手一面, 小手一胴, 面一胴, 面一面, 突一小手, 突一面, 小手一面一胴
	かつぎわざ	かつぎ小手, かつぎ胴, かつぎ面
	片手わざ	片手面, 片手突
	上段わざ	上段から面, 上段から小手, 上段から胴
応 じ わ ざ	すり上げわざ	面すり上げ面, 小手すりあげ面, 面すり上げ小手, 突すり上げ面, 小手すり上げ小手, 面すり上げ胴
	打落しわざ	胴打落し面, 突打落し面, 面打落し面
	返しわざ	面返し胴, 面返し面, 小手返し小手, 胴返し面
	抜きわざ	面抜き胴, 小手抜き面, 面抜き面, 面抜き小手, 小手抜き小手

て今回は技術内容を、主として学校剣道の指導内容にもられている、表4にしたがって記入した。勝負の類型は3表にあるが、1類型は1本先取の中、2類型は2本先取の西、A類型は2本目に負けてはいるが勝者の山中、A'類型

はA類型の敗者山、B類型は1本目に負けているが勝者の中川、B'類型はB類型の敗者上田、の如く6類型に分類し技術内容は、しかけわざ、応じわざの二大分類を基礎として、それを各各について更に細かく分析して記入した。

記入に際しては、同一試合を数人の記者によって、それを平均化するか、或は数人同時に合議して打突内容を決定すれば一層正確で、客観化するが、実際には相当の複雑性を増して困難であったので個人が判定した技術内容を記入した。

したがって、この点だけでも主観性は免がれないが更に又瞬間的な打突の判定に当っては、学習内容に示されている通り、しかけわざは相手の隙を見出し、自から積極的に先をかけて打突する技術と考え、応じわざでは、相手の打突を、しないと体によってさばき、相手の隙の生じた所を打突する技術として考えまとめたものであるが、例えば出ばな小手と押えごて（学習内容では抜き小手）の区別はしかけわざか応じわざかをきめる事でもあるし、又同じ応じわざでも、抜き胴と返し胴の判定は、技術の低い段階ほど不明瞭であるので、低段位者の記入に際しては一層主観が入っている事は免がれない。

尚今回の試合は全国的試合が少なく、地方的なブロック試合が多いのでそれだけ一般高段者のみの試合結果とは多少のずれがあるだろうという事も附加したい。然し学校剣道の技術内容として考えて見れば一層接近したものを持っているとも考えられる。即ちスポーツ剣道としての、試合技術の判定は、有効打突としての条件を具備している場合に、判定されるもので、その条件は第1に定められた打突部位を打っていること、第2気剣体一致の打突であり、単にあたったというものでない事。第3に打突の機会（先）と考えられる、次の様な機会に打突している場合である。

即ち、1. 自己が相手の気、剣、体を殺して打突している場合の三殺法の打突で最も積極的なしかけわざの場合であり、2. 相手を改め、フェイントをかけて相手に隙を作らせて打込む場合と、3. 相手が自から隙を作る場合の打突（出ばな）。4. 又相打の場合であっても、よく観察すれば、時間空間的に必ず相手の打突より先に出ている場合と、5. 相手の打突を防いで（打ち落とし）打っている場合があり、6. 尚

相手の打突を防いで打突する場合でも、相手の打突を予知しない時と、7. 予知して之に対応する場合がある。以上7つが打突の機会であり先きの三条件が具備しておれば得点として判定される。

しかけわざは4までに止め5から7までは応じわざと考えた。技術内容の判定は、いくつかの条件が総合され、而も相手との関係において判定されるものであって、客観的には同じ打突であっても、相手との関係によって或は決定打突に判定されない場合もある。然し試合の場における体制によって、三人の審判員の主観が総合されるわけであるから一応客観性のあるものと認定しなければならない。

この点武術としての剣術とは趣を異にし、ルールもその条件を遂行させるために発展して来た。したがって、観察する第三者は他の要素もさる事乍ら、試合者、審判者で構成する体制と一体になって、体制の一員としてその中に統一されていなければ審判者の判定を更に技術内容に分類する事は困難である。しばしば第三者の見た試合打突の推定と、審判員の判定と異なる感を持つことがあるが、それは凡て審判者の判定に依る事にした。それは第三者としての自己の持つ体制よりは審判者の構成する体制がより強固であると考えたからである。

この点他のスポーツが比較的単一要素で判定がなされるのに対して剣道は経験の少ない第三者には判定の困難な事が多く、試合者自身ですら、しばしば自己判定と審判判定のくいちがいを生ずる位主観の働くものである事を考えねばならぬ。尚表中に例えば返し面とあるのは相手の打突部位の如何を問わずそれを応じ返して面の決定打突をなしている場合であって、例えば面返し面、小手返し面、胴返し面も凡て返し面として記入されている。（相手の打突に対するわざの変化はこの次にゆづる）。

尚本表は打突本数で記入されているので（小星）、1類型、A' 類型、B' 類型は何れも小星1本宛であるが、2類型、A、B、類型は小星が2本宛あるために勝者数は半分である。

### 3. 結果と考察

1. 図1 Aに見る通り有効決定打突率は高段位者の一般が最低であるのは、一本勝負で決定されている事を示すものである。図1 Bのしかけわざと応じわざの比は、各級共応じわざは極めて少なく3分の1位であり又高段位者になるにつれて逆比をなしている。中学高校においては攻撃わざで決定される場合が多く、かりに応じわざを使用しても不成功に終わっている場合が多い事を示している。つまり高段者に進むにつれて、さそいわざを持って応じ返している事及びその技術は決定打として完成されている事が推測出来る。試合はたえず先の機制で行なわれているが高段に進むにつれて、無形の先としての技術、つまり対の先、後の先が有形の先々の先に変るであろう。虚々実々という剣道の試合は無形の先に於て体制を構成するものであろう。

2. 図2の1類型からB' 類型までの中A, A', B, B'は3本勝負でありそれらの事に就いては前回述べたが、図Aで分かることは、しかけわざと応じわざの関係に非常に開きがあり、又例えばB類型に見られるように後半で決戦する場合先取された者は盛に攻撃わざを出している事、そして遂に勝者となっているに反し、B'

図1

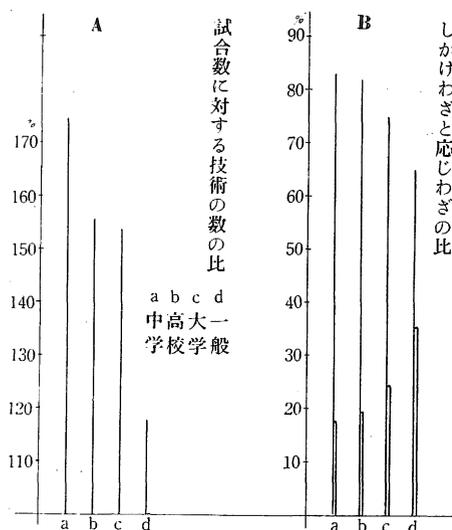


表5 各級別しかけ、応じわざ及試合数(数)

級	しかけわざ	応じわざ	計	試合数	延人員
中学	595	120	715	410	420
高校	680	148	828	530	667
大学	758	131	889	575	792
一般	1,138	230	1,368	1,153	1,998
計	3,176	629	3,800	2,668	3,877

表6 各級別しかけわざ、応じわざの類型別表

しかけわざ (打突数)								
級	類型	1	2	A	A'	B	B'	計
中 学		92	286	83	32	60	42	595
高 校		152	320	62	33	76	37	680
大 学		82	408	70	43	105	50	758
一 般		189	522	108	60	175	84	1,138
計		515	1,536	323	168	416	213	3,171
応じわざ								
中 学		26	53	20	7	10	4	120
高 校		26	77	19	7	12	7	148
大 学		13	69	21	3	16	9	131
一 般		32	96	39	12	33	18	230
計		97	295	99	29	71	38	629

類型の敗者は先取しながら攻撃わざは減少し、応じわざに頼るために遂に大事な後半決定において敗北している事である。体制のばん回のためには最も積極的な三殺法のしかけわざで、相手の気をころし、剣を殺し、体を殺してかからねばならぬ事を示している。

特に技術的に返しわざの未熟なものはそのことが顕著であり高段者において見られるように無形の技術がこなされている場合は図3 Aに見られるように稍開きがちちまって来る。図2のB, Cは各類型にしたがって、全しかけわざ、応じわざ各々の級別の比較である。

この場合例えば中学校に於ては、A類型の場合しかけわざが非常に多く見られるがB類型に攻撃わざが出ないのは体制確立や崩壊が前半にその鍵があるわけで、あくまで1本先取の体制を確立させることが必要である。前半で体制確

図 2

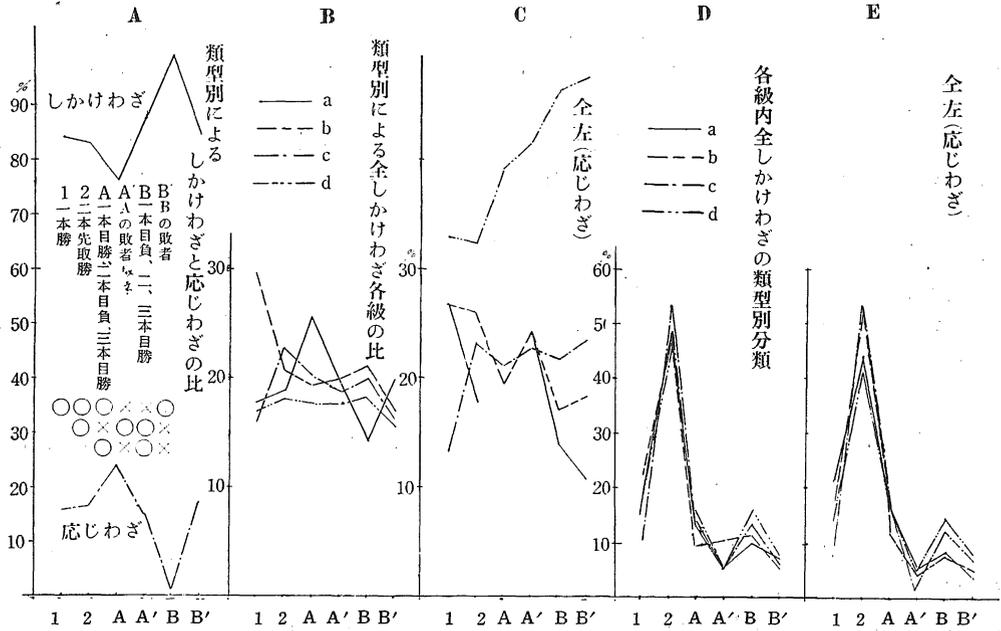
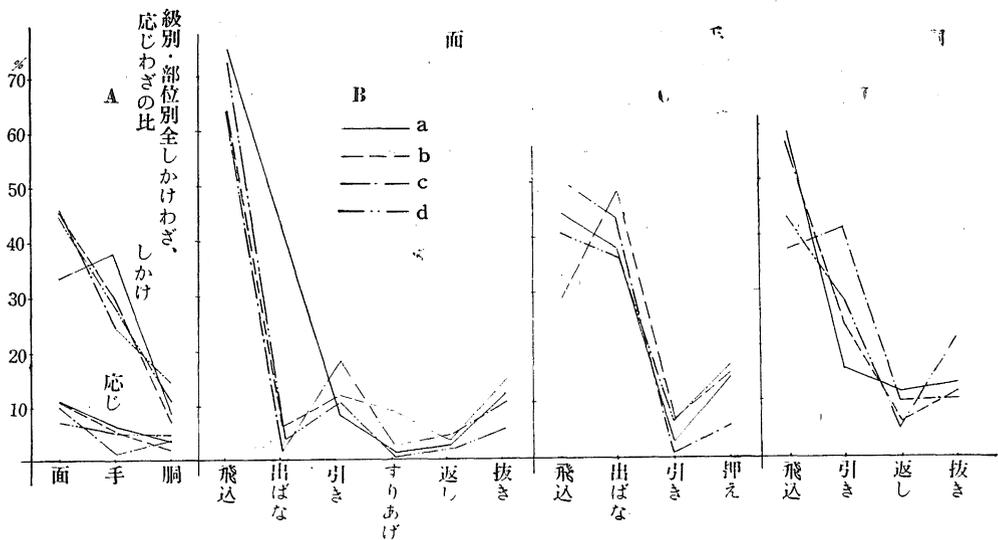


図 3

各部位の技術内容別による各級の比較



立し様とする傾向性は高校に於て特に顕著に現われており、他の級は大体に似通っている。図 2 C に見られる一般高段者の試合は応じわざが高く特に尻上りに上昇しているのは、3 本勝負になるにつれて、試合技術が有形、無形入り乱れ、有形的な攻撃技だけでは、無形的な技術の

前には直ちに切り返されている事を物語るものである。相手を引きよせて、切り返す真の精神的攻撃力が無形の体制を構成していることが推察出来ると共に決定打突としての円熟性も考えられ、試合が後半になるにつれて真の総合的な力が応じ返しわざとして完成してゆくことを

示している。

即ち中学校においてはその反対に、ほとんど返しわざは効を出さず特にB'は顕著に低下している。これらのことは中学と高校は相関性高く、大学は一般高段者の中間を走っている事からでも技術発達段階が察知出来る。図2 D, Eは各級内のしかけわざと応じわざの勝負類型別の表である。各級内、例えば中学校だけの分類は他の級とほぼ重なったグラフになっているのは各級は非常に互いに相関性が高いことを示している。つまり初心者の段階も高段者の級も、しかけわざ、及び応じわざの内部比は一定である。つまり試合分析によれば中学校は中学生なりに相手との試合の内容は高段者が高段者と試合する内容と関係においてはほぼ一定であることである。

3. 図3 Aは打突部位の決定打総数に対する各級のしかけわざ、応じわざの総合比である。B, Cは更に各部位別に決定打総数に対して技術内容によって分類し各級内を比較したものである。各級共相関性は非常に高く、打突部位は前回の通り面、小手、胴の順であり、又しかけわざ、応じわざ共に各級相関性を持ち、更にしかけわざと応じわざの関係は図1のBを裏がきしている。各部位共飛込は最高であるが、他の技術内容例えば面は、すりあげ技術を、小手は引き小手を、胴は返し胴を最低としてい

る。

この事はその技術の困難度を示すものであり、又同じ技術である出ばな技は、出ばな面と出ばな小手を見ても分るように、部位によって逆になっている場合もある。この事は歩行する場合前進が容易で後進が困難であるように、剣道においても自然な、無理のないわざが部位によって異っている事であり、初心者を教える場合及び試合技術として考えねばならぬ問題を示している。

即ち面技は飛込、引き、抜き、小手は飛込、出ばな、押し、胴は飛込、引き、抜きわざが容易で且つ自然であり、それらに共通したわざとしては飛込、出ばな、抜きわざが各部位打突の基本的技術であり、それは同時に打突の機会(先)と一致していることに気がつく。又この図で云えることは、学習内容にもられている払い面、払い胴、払い小手、すり上げ胴、返し小手等が試合の場ではあまり使用されず、又決定打突にはほとんどないということである。

剣道の技術指導に於ては、各部位に対する打突の基本的技術を厳選して重点的にすべきか、又はあらゆる技術を指導して、各自の得意な技術を完成させるのが効果的かを考えた時、剣道は元来試合が中心でないので勿論後者でなくてはならないだろうが、最近のスポーツ剣道に於ては、試合を無視することは出来ないし、試合

に於ては相手に勝たねばならぬとすれば此の図表に現われた結果は重視されるべきであろう。ここにコーチとしての剣道指導法の研究が生まれねばならない理由がある。

4. 技術内容を各類型にしたがって、各級内を分類したのが図4, 5である。図4は、しかけわざを、図5は応じわざを各技術内容に細分したものである。双方共各級内の関係が高い相関性を持っている事である。上級になるにつれて、高等と思われる技術が現われて来る。又

図4 しかけわざの類型別による各級内の分類

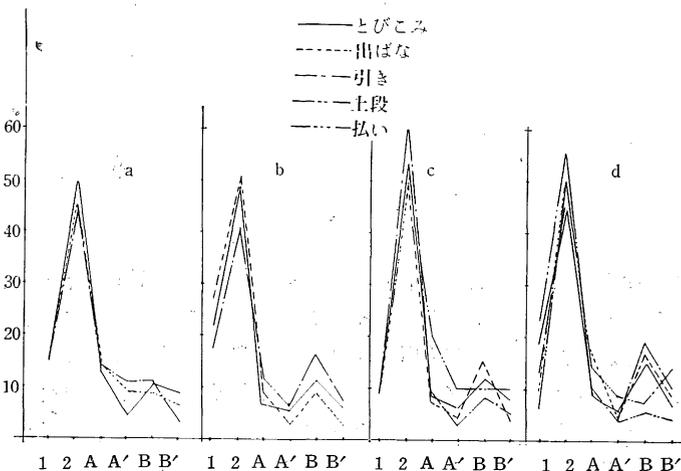


表7 各級しかけわざの技術内容 (打突数)

技術内容		類型						計
		1	2	A	A'	B	B'	
中 学	飛 込	68	218	61	17	45	3	444
	出ばな	15	43	14	9	8	5	94
	引 き	9	25	8	6	6	5	56
	払 い					1	2	1
	計	92	286	83	32	60	42	595
高 校	飛 込	92	203	28	22	48	27	420
	出ばな	44	80	13	6	13	3	159
	引 き	16	37	11	5	15	7	91
	計	152	320	62	33	76	37	680
大 学	飛 込	51	248	41	30	60	35	465
	出ばな	11	63	8	5	17	4	108
	引 き	19	122	19	7	27	11	205
	上 段	1	5	2	1	1		10
	計	82	408	70	43	105	50	758
一 般	飛 込	138	331	64	45	113	50	741
	出ばな	17	85	21	7	29	15	174
	引 き	22	72	16	7	29	15	161
	かつぎ		1					1
	上 段	11	26	5		3	2	47
	計	189	522	108	60	175	84	1,138

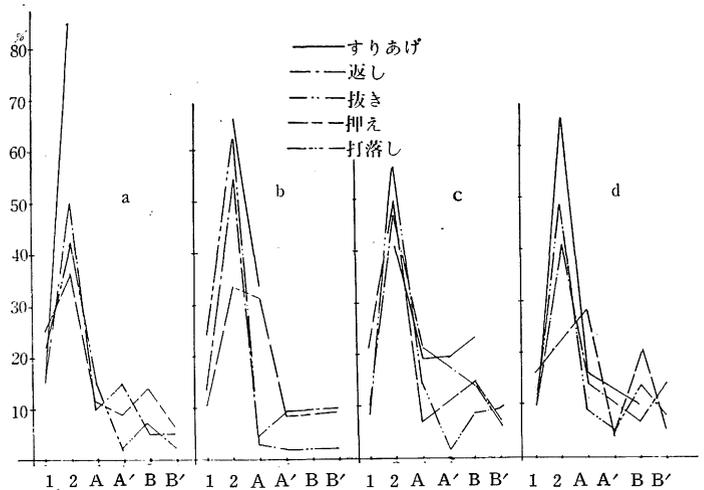
表8 各級応じわざの技術内容 (打突数)

技術内容		類型						計
		1	2	A	A'	B	B'	
中 学	摺 上 げ	1	6					7
	返 し	3	10	2	3	1	1	20
	抜 き	13	24	14	1	4	1	57
	押 え	9	13	4	3	5	2	36
	打 落 し							
	計	26	53	20	7	10	4	120
高 校	すりあげ		2	1				3
	返 し	3	12	1	2	2	2	22
	抜 き	18	47	2	1	6	1	75
	押 え	5	16	15	4	4	4	48
	計	26	77	19	7	12	7	148
大 学	すりあげ		6	2	2	3		13
	返 し	4	18	8		5	2	37
	抜 き	6	38	10	1	6	6	67
	計	13	69	21	3	16	9	131
一 般	すりあげ	2	12	3				
	返 し	3	12	4	3	2	4	28
	抜 き	15	55	11	6	16	9	112
	押 え	12	16	20	3	14	4	69
	打 落 し		1	1			1	3
	計	32	96	39	12	33	18	230

応じわざの図5においては各級内の相関性が稍乱れて来るのは応じわざは、しかけわざよりも体制としては複雑な要素を持ち相気になって試合することは困難が増し、自己のペースを乱さず、たえずしかけわざを持って先に懸かることが試合に効を奏するということ、つまり身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあるという機先を制する事が比較的容易であることを示している。

5. 図6, 7 は勝敗の類型に基づいて各級の相関を、しかけわざ及び応じわざ内の技術内容別に考察した図である。6図では各級共飛込技を最高としていること及び引き、出ばなは共に低い%を示しているが、中学、

図5 応じわざの類型別による各級内の分類



高校, 一般に於ては出ばな技が高く, 大学に於ては引きわざが高いが, 中学, 大学, 一般ではそれがほぼ平行的な関係にあり, しかけわざの場合は飛込を中心として, 次は出ばな, 最後に引きわざと稍一定した打突内容が考えられることである。6図は表7を縦に見た図であり図4は別表7を横に見た図であるが, しかけわざの場合は双方共非常に相関性が高く, 図7は図5と同様応じわざの乱れを現わしている。

即ち図7に於て1類型は大体各級共抜き, 押え, 返し, すり上げと上位から順次稍一定の線である。つまり応じわざで1本勝をする場合の1類型及び, 2本ストレート勝の場合の2類型は, 抜きわざを最高として, すり上げわざが最低である。それだけすり上げわざは相手の攻撃に対して成功率が低く困難なわざである。又A, A', B, B'の3類型になって3本勝負になると技術の乱れは, 各級共顕著になる。

相手の攻撃に対して技術の乱れは, 唯外的に形成している有形的な皮相的な表相のうすいことを物語り深層を形成しているはずの無形な心の乱れを如実に示し, 否深層部の無形技術である精神(こころ)が技術の方向性を指導せず(有形な技術と同次元になってしまったため)1, 2類型で使用した普通の技術が必ずしもコンスタントに使用されていない事を物語るものであろう。

然し高段者においては1, 2, A, A', B, B'共技術は稍コンスタントに出ているのは, 技術の確実性及び心的崩壊体制がコンスタント

図6 全しかけわざの類型別各級比較

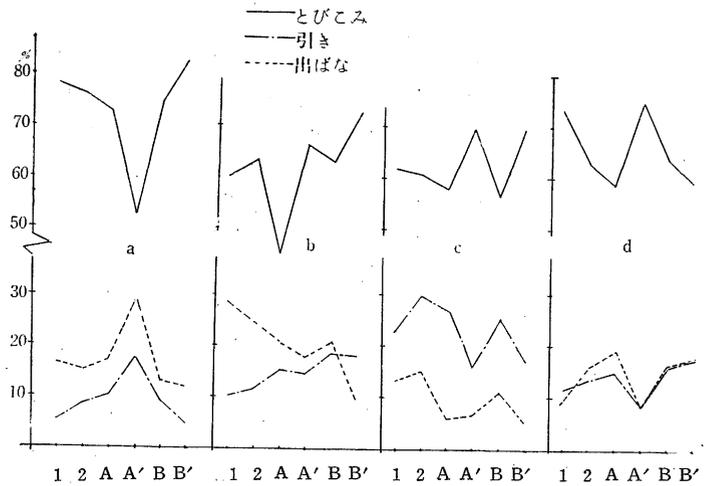
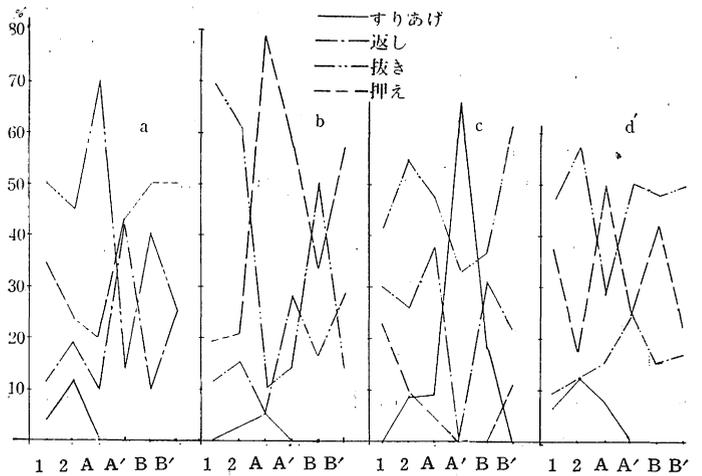


図7 全応じわざの類型別各級比較



で, むらのないことを物語るもので, 技術の上達が心的体制の確立, 即ち精神の形成を司つてとる事を暗示するものであろう。技術から精神体制を洞察することは困難であるが図7のa, b, c, における, 1, 2, A, A', B, B'の乱れとdにおけるそれら類型の乱れの相異は技術上達者との比較において, 精神的なものの乱れ, 即ち全心的な崩壊体制を洞察する手がかりと考えられる。即ち相手の如何なる攻撃に対しても, 一定した技術が使用されることは, それだけ心的体制の確立を示すものである。自己のペースでたえず平常心で技術が使用出来る

ことは技術上達もさる事乍ら、心的体制の上達を考え併せ考察しなければならない。

それは、技術の不安定性から体制崩壊を来す未熟者に比して心技一体の自我が確立されているわけで、どこまでが技術でどこまでが精神か判然としがたい技術即精神、即ち無我を確立しているわけである。応じわざは技術が困難だと云うが、実は相手に対する精神の不安定性、技術の奥に潜む自己体制の未熟さを物語るものである。7図のdに於て各類型は間隔は異なるが各技術は他のa, b, cに比してほぼ一定した安定性が見られる。

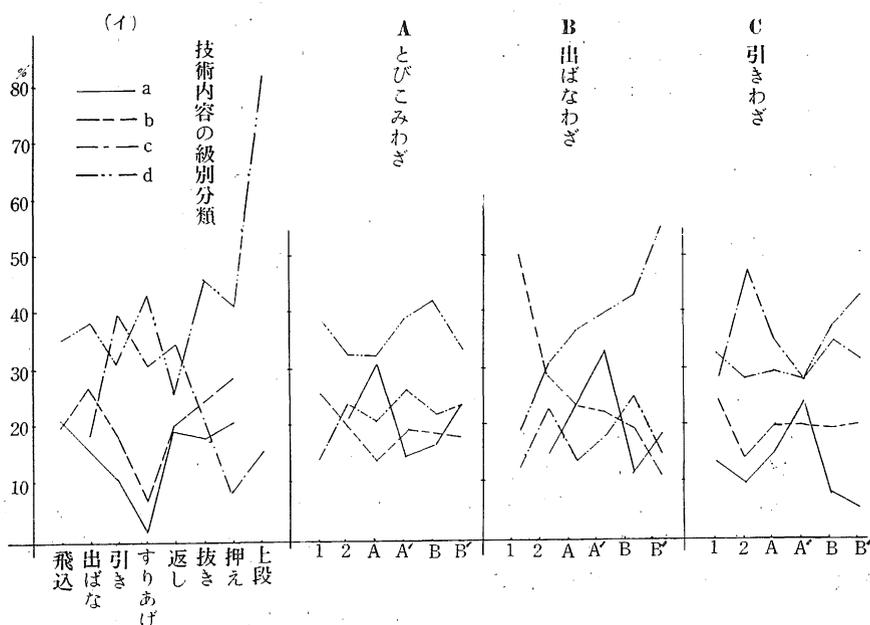
間隔が異なるのは相手方の攻撃技術によって来たものと推察される(攻撃技術が今回は不明のため推察にとどめる)。応じわざは、形の上では、対の先、後の先に考えられているが、かく見る時は内容的には常に先先の先の技を無形の中に潜在させているわけで、相手を殺すことなく十分に相手を引きよせて間髪を入れず、きつ先三寸で、満を持して切り返して相手の攻撃力をお返しするわけであり、それだけ心的体制

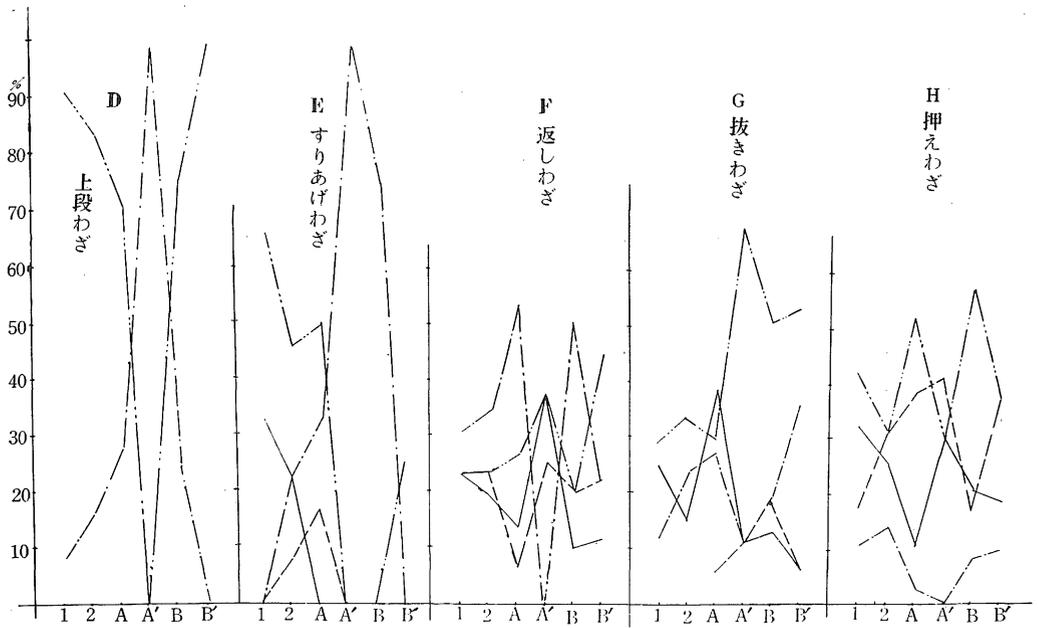
に余裕がなければならぬわけであり、先先の先の技が無形の技術つまり精神的技術に変わった懸待一致の境地から出る技術である。之等技術の中最もよく成功するものが抜きわざであり次が押えわざ、返しわざである。(押えわざは抜きわざのことである学習指導内容)

6. 図8イは例えば全飛込わざに対する各級の飛込わざの比較である。これに依ると例えばすり上げわざは低段位者には困難なわざと考えられる。飛込、出ばな、押え、抜きわざは一般的に多く使われる技術であり、ついで引きわざとなり、高段者専用の技術のようにになっているのが上段わざである。中・高の低段位級には一定の相関があり又その級と一般の高段位級は、技術内容が逆になり、大学は何れにも相関性がないが見られる。即ち各技術内容を更に勝敗類型によって各級の関係を見たのが図8A-Hである。

8A, 即ち飛込は(追込を含む)一般高段者によく特にB類型即ち一本目に負けた場合は積極的にわざをしにかけているが、中学校級では反対

図8 各技術の類型別分類による各級の比較





にA類型即ち一本先取した時に積極的にしかけている。一般と高校が相関があり、中学は逆である。そして大学には相関性がないのは、中学の未熟性から高校で稍統一し、大学で再び分解して一般で更に統一するという過程をとるものであろう。剣道の技術も他の技術と同様今回の各図表にも見られるように大なり小なりに総合、分析、破壊、統一という過程をくりかえしているようである。

8 Bには特に高校と一般の出ばなわぎが逆になっている事を注意したい。有形と無形の技術が類型別によって判然としているところである。8 Cに中学と大学の逆の相関が見られるのも発達段階の一般的現象で、大学に引きわぎが多いのは、攻めわぎと応じわぎの接点が引きわぎの技術として顕著になったものである。即ち懸からうとする攻め技が待中懸に変化する段階であろうがまだ完全な統一が見られない。他の応じわぎは、相手の攻撃わぎによって複雑化して来ることを示し、各級共相関が見られないが、高段者は多くの種類の応じわぎを用いている。

表9 技術内容の打突部位別中学校 (打突数)

技術内容	部位	類型						計
		1	2	A	A'	B	B'	
飛込	面	39	149	42	9	30	22	291
	小手	19	57	14	2	10	7	109
	胴	10	12	5	6	5	6	44
出ばな	甲手	15	43	14	9	8	5	94
引き	面	6	16	5	5	5	0	37
	小手	1	4	1	0	0	1	7
	胴	2	5	2	1	1	1	12
払い	甲手					1		1
計		92	286	83	32	60	42	595
すりあげ	面	1	5					6
	小手		1					1
返し	面	1	8		1		1	11
	胴	2	2	2	2	1		9
抜き	面	10	21	12	1	3	1	47
	胴	3	3	2		1		10
押え	小手	9	13	4	3	5	2	26
計		26	53	20	7	10	4	120

7. 表9-12表は、しかけわぎ、応じわぎの技術内容を、打突部位別、類型別に各級内を分類して各級の関係を見た表である。中学校のしかけ技の相関は飛込面、飛込小手の一群と出ば

な小手、飛込胴及び引き胴の一群であり、それらは又各群逆になっていることである。即ち最初の一群は類型A'に低く後の群は高いが、この三本勝負の試合において、消極的になった敗者の性格が比較的攻撃性の少ない技術として出た

表10 技術内容の打突部位別表高等学校 (打突数)

技 術 内 容	部 位	類 型						計
		1	2	A	A'	B	B'	
飛込み	面	59	142	22	15	34	18	290
	小 手	19	45	4	4	11	2	85
	胴	14	16	2	3	3	7	45
出ばな	面	7	9	5	3	4		28
	小 手	37	71	18	3	9	3	141
引き	面	12	18	8	3	9	5	55
	小 手	1	11	2		2	1	17
	胴	3	8	1	2	4	1	19
計		152	320	62	33	76	37	680
すりあげ	面		2	1				3
返し	面	2	10	1	2		2	17
	胴	1	2			2		5
抜き	面	13	43	2	1	6	1	66
	胴	5	4					9
押え	小 手	5	16	15	4	4	4	48
計		26	77	19	7	12	7	148

表11 技術内容の打突部位別表大学 (打突数)

技 術 内 容	部 位	類 型						計
		1	2	A	A'	B	B'	
飛込	面	29	167	18	23	35	20	292
	小 手	10	61	14	4	15	11	115
	胴	12	20	9	3	10	4	58
出ばな	面	1	8					9
	小 手	10	55	8	5	17	4	99
引き	面	11	42	9	5	11	5	83
	小 手	3	14	1	1	8	1	28
	胴	5	36	9	1	8	5	64
上段	面	1	5	2	1	1		10
計		82	408	70	43	105	50	758
すりあげ	面		6	2	2	3		13
返し	面	1	11	5		2	2	21
	胴	3	7	3		3		16
抜き	面	4	28	8		6	5	51
	胴	2	10	2	1		1	16
押え	小 手	3	7	1		2	1	14
計		13	69	21	3	16	9	131

表12 技術内容の打突部位別表一般 (打突数)

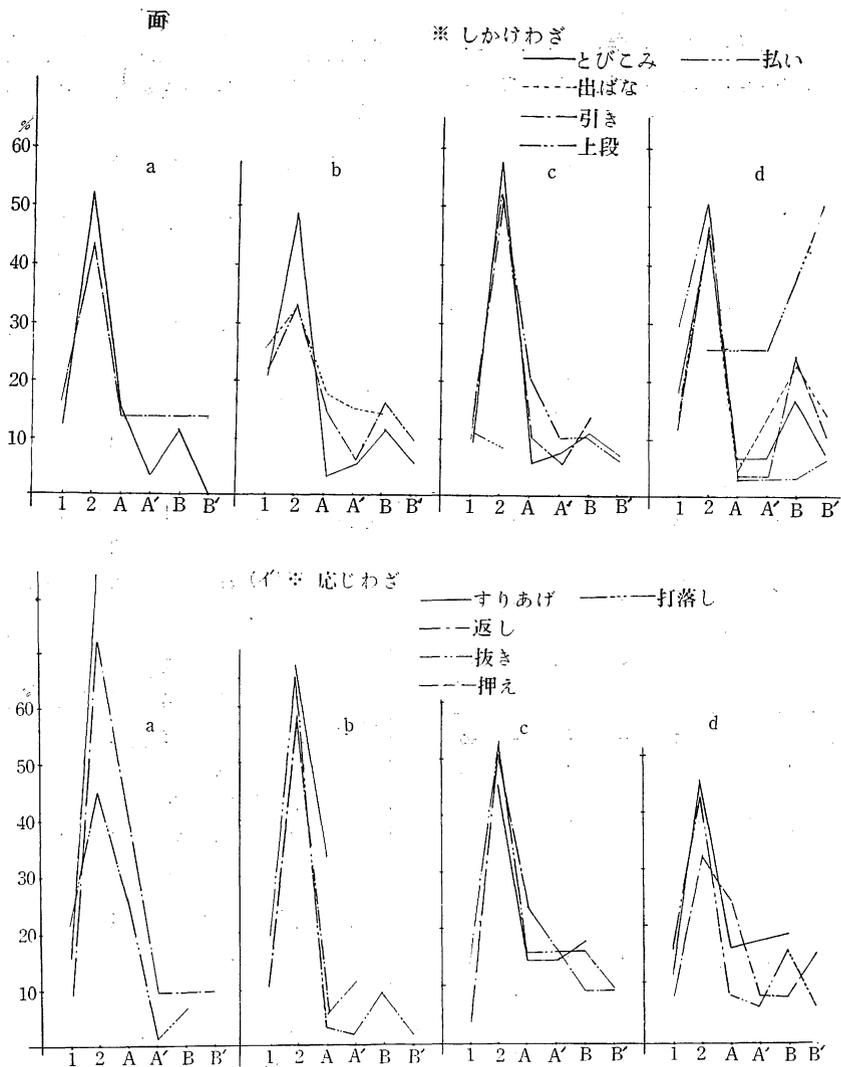
技 術 内 容	部 位	類 型						計
		1	2	A	A'	B	B'	
飛込	面	86	216	32	29	80	36	479
	小 手	39	68	24	11	22	9	173
	胴	13	47	8	5	11	5	89
出ばな	面	3	10	1		5	3	22
	小 手	14	75	20	7	24	12	152
引き	面	9	33	3	2	16	7	70
	小 手	5	9	4	5	5	5	33
	胴	8	30	9		8	3	58
かつぎ	面		1					1
上段	面	9	18	1		1	2	31
	小 手	2	4	3		2		11
	胴		4	1				5
払い	面		1		1		2	4
	小 手	1	6	2		1		10
計		189	522	108	60	175	84	1,138
すりあげ	面		11	3		1		17
	小 手	2	1					1
返し	面	1	4	3	1	1	2	12
	小 手		3	1				4
	胴	2	5		2	1	2	12
抜き	面	10	30	6	5	12	5	68
	胴	5	25	5	1	4	4	44
押え	小 手	12	16	20	3	14	4	69
打落し	面		1	1				2
計		32	96	39	12	33	18	230

ものであろう。気魄の消極的な時は自然に技術も捨身的な攻撃技術は少なくなるものである。出ばなわざで小が多いのもその一例である。

高校の場合は各部位共飛込わざ、出小手及引胴の相関が見られる。而もそれらはA類型において逆比になっているのはdの一般の場合とよく似ている。ここにも高校と一般の相関が発見出来るが、飛込的な基本技術を一応完成して内外の体制を統一する懸待一致の攻防巧みな技術の一応の完了を見た所であろう。大学の部に於ては飛込面を除く、出小手、飛込小手、引き面、飛込胴と大部分の相関が発見出来、而もA、A'において顕著に見られるのは、面を除く基本的

図10 (イ)

各級の類型別各部位の技術内容



打突の平均的なのびを示しているだろう。之は特に注意をすることが必要である。

之等各級において、しかけわざの面が群を抜いて成功率が高く、他の部位の技術は各級の相関性は異なっている。応じわざに於ては、しかけ面の様な顕著な成功率もなく各部位及技術内容を見ても、これといった相関性が発見出来ない。前述の通り相手の攻防によって虚々実々の複雑性が技術の未熟性と相まって現われたものであるが、その中で抜きわざが最高にある事は唯一の共通点である。

8. 図10は各級内の打突技術内容を類型によって分類した図である。即ち級内の打突を部位別に応じわざ、しかけわざに二分しそれを更に技術内容に分類して類型化し各級内の相関及各級間の相関を見たものである。イ、イ'に於ては級内、及び級間の相関が見られ、即ち中学級aも他のb級c級d級と試合の内容は面の技術に関する所同じ関係が展開されているわけである。

然しd級になれば高い他の技術の確率が見られる。同様なことはロ、の小手のしかけわざに

図 10 (ロ)

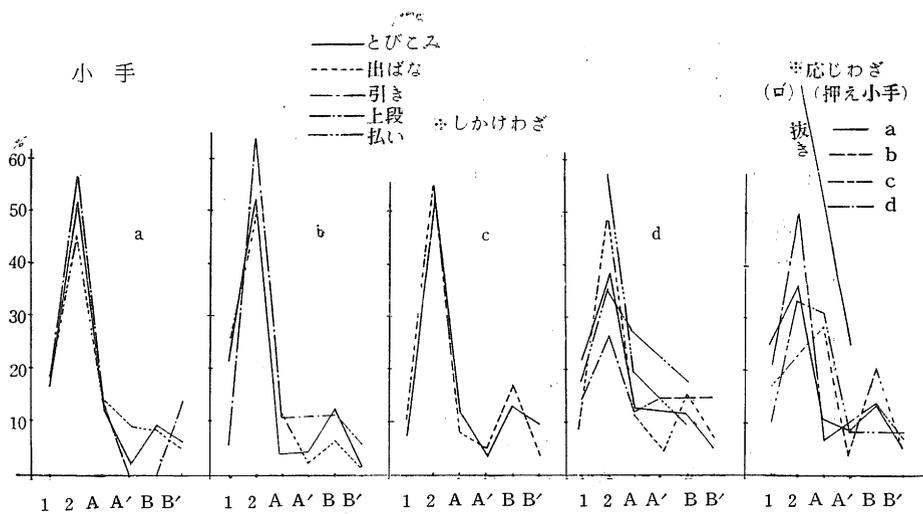
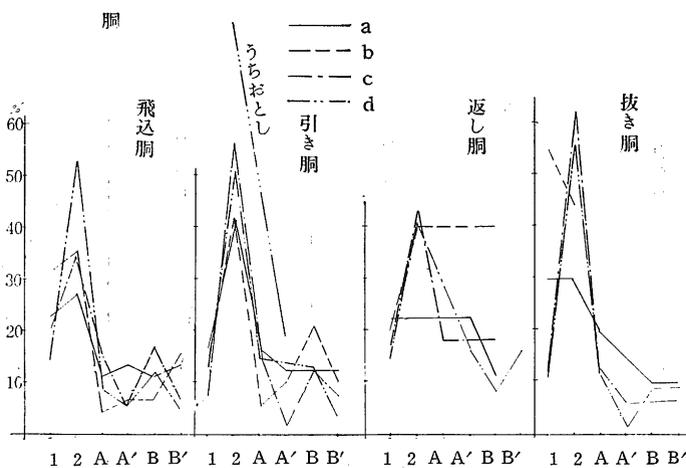


図 10 (ハ)



についても言える。ロ'の小手の応じわざは各級共押え小手が主体で、各級共各類型に非常に高い相関が発見出来る。ハの胴わざも高い相関を示し、各級共飛込胴より引き胴が多いのは面、小手わざと対称的である。ハ'の応じわざについては相関性の発見に苦しむ。

9. 図11は全打突数を各部位毎に集計し、各

部位を技術内容に細分してのち類型別に各級の相関を見た図である。全技術をしかけわざ応じわざに分類した図は3Aに見られるが11の△印は各部位毎にしかけわざ、及応じわざの各々の全技術を各級別にした図である。応じわざには相関性が乏しいことが発見される。

図 11 (イ)

類型別分類による面の技術内容の各級の比較

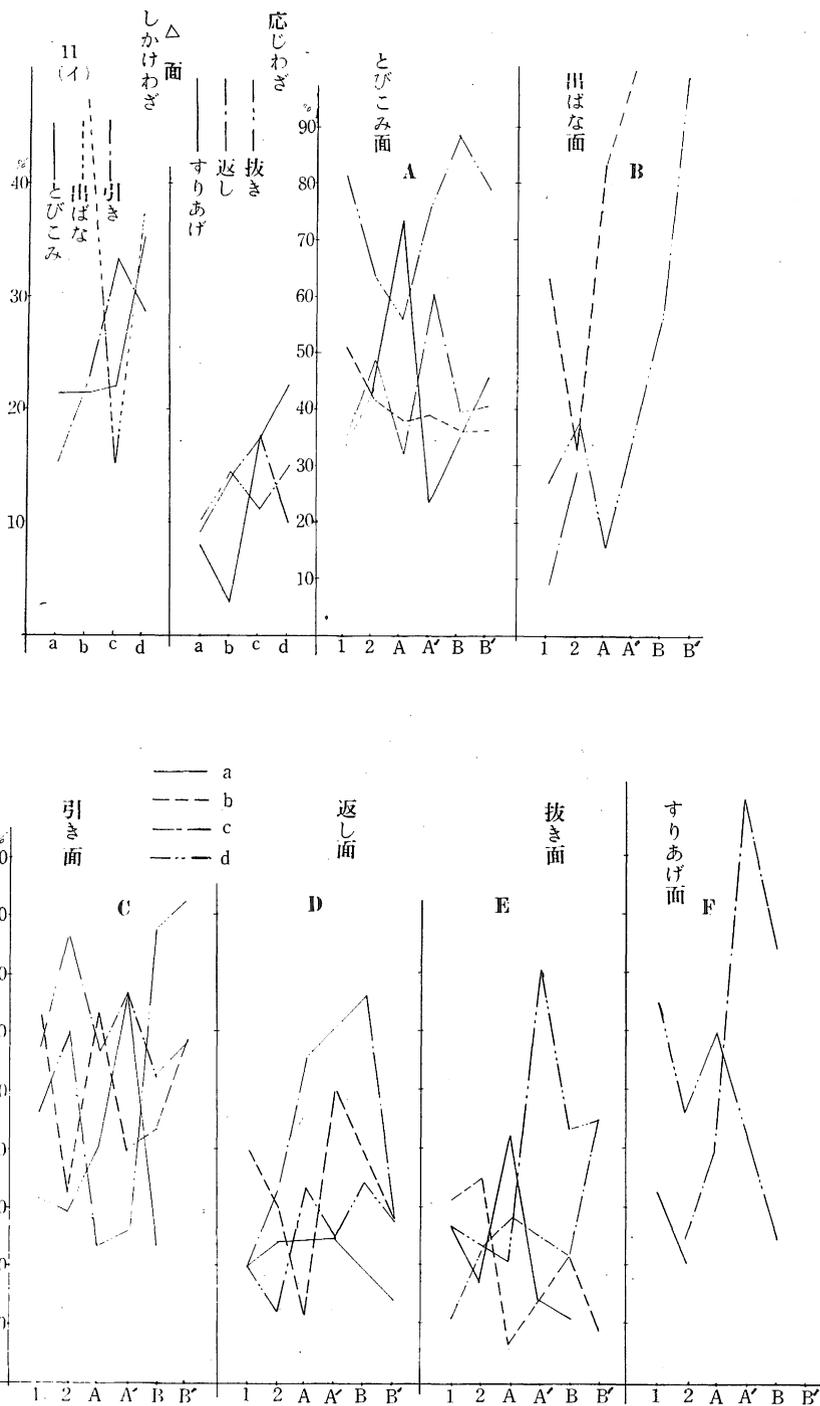


図 11 (ロ) 類型別分類による小手技術内容の各級の比較図

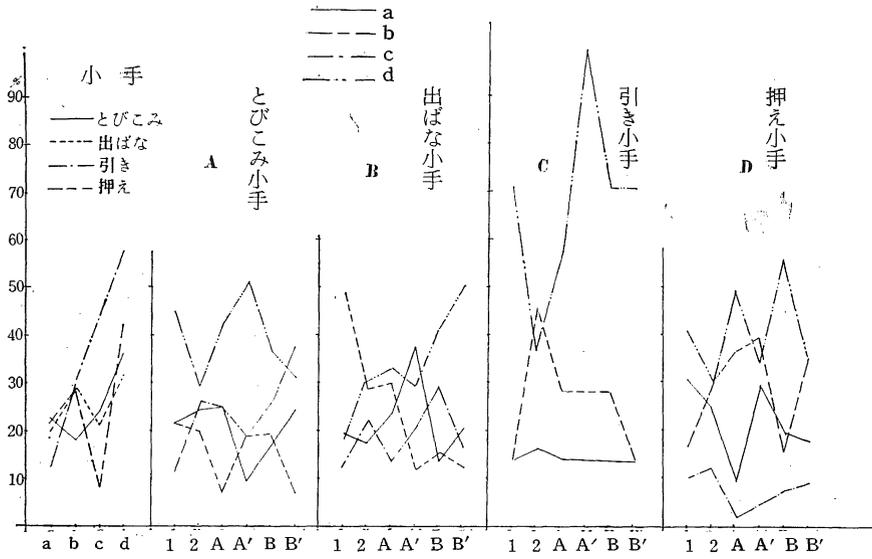
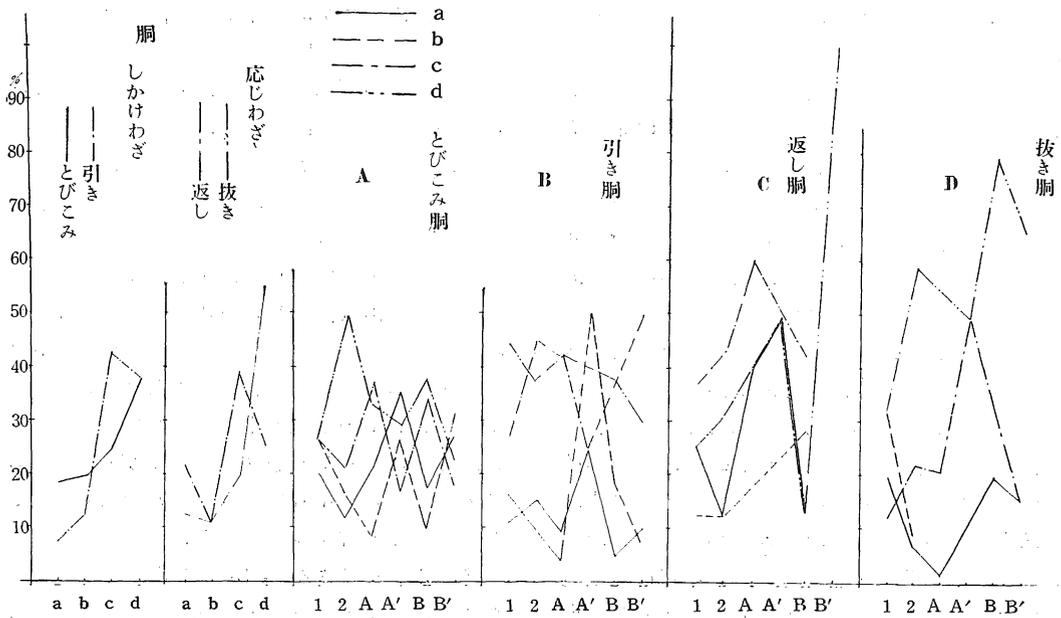


図 11 (ハ) 類型別分類による胴技術内容の各級の比較



#### 4. 要 約

勝敗決定を打突の技術内容から考察して試合の場の体制の考察を試みるために試合技術の分析をしかけわざと応じわざの二群に大別して級内の関係、各級間関係を調べそれらを更に各群共技術内容に細分析して、それを主軸として相関性を調べ、又反対に各打突部位別に技術内容を調べ打突技術をたて、よこからその交刃を求めて、試合の場で最も多く使用される技術の性格と、困難な技術内容についての理論の考察を進めたが、本調査では、特に応じわざに於て相手の打突して来る技術内容が不明のため予期していた結論を出す段階に至らなかったこと、判定された技術を第三者が分析することは主観的になり稍不正確な点が免がれない事、更に地方大会が多くて、高段者の試合が少ない事等結果を出すには早尚の感があった。もし剣道試合も他の大部分のスポーツのように、スコアブックによって正確に記入出来れば或はより正確性が期待出来るであろう。それにしても、ポイントに到るまでの内容を重大な要素とする剣道技術の分析は、多くの要素が入るために困難であることは免れまい。

ポイントの部位は、面、小手、胴、突の四部位であるし又その打突方法も基本的には簡単であるが、打突の技術は過去幾多の流派を生じているように千変万化して行なわれるわけで、特に相手の変化によって全く複雑で、決して二度と同じ技術をくり返すことの出来ない位二人の関係において創造する創作活動である。

いわゆる剣道の極意とされている懸中侍、侍中懸とかいわれる懸侍一致の精神的体制や、驚懼凝惑といわれる心の四戒、或は残心、捨身といわれる心の持ち方等凡て剣道の場は弁証的構造をしており、機先を制することも、三段法の攻撃法も皆心、気、力の一致、心、形、刀の一致、又は気、剣、体の一致として自我構造に内外が統一されて他者に対するものであるから自我と他者を含む全体制としての試合の場は常に虚に実々で、敵の隙を隙と見ることは、実は虚でなくて実であり、そのことはかえって自己の

隙を敵という鏡の前に、つまり敵の姿に、自分を己を発見しているという、有形、無形に弁証的な体制の場である。

例えば技術で言いかえれば、面技に強いものは、かえって面技で敵に破られる場合が多いという、全く瞬時も放心を許さぬ場面である。このことは初心者、高段者を問はず、各々の段階に応じて等しく、構成している体制である。このことは各々の図表に現われた各級の技術比較に於て相関のあることから察知出来た。

武術に源を持つ剣道は或は武芸といわれ、時には撃剣、剣術といわれて技術の修練を第一目標にして修業を行っていた。そしてその時代には人間形成という言葉はあまり用いられていなかったかもしれないが、人間形成のためにきびしい修業をしたものであった。現代は剣道に限らず技術を通しての人間形成ということがあまり、高く唱えられるために、技術を第二義的に考え、技術を方便とし、軽視する傾向が生じた。そのためにかえって人間形成という終極の目標達成にその中間過程を失って支障を来している感がある。刀の操法から発達した剣道は刀の操法の要素をあくまで基本的技術として、ルールが考えられ、スポーツとして発達しなければならない。例えば遠方の獲物をなげあてるために発達した武術としての槍投は、現代スポーツの槍投としても、遠距離、一定の目標（狭いゾーン）という初期の要素をあくまで堅持しているわけである。

現代、スポーツとしての剣道の試合の場に於ける打突技術は、かかる意味からすればあまりにもチャンバラゴッコになりすぎている感があり、単なるアテッコである。それだけ傍観者は第三者としての審判判定に苦しむ場合も少くない。皮を切らせて肉を切り、肉を切らせて骨を切るといった、正確な、理合にかなった自然のわざ、つまり誰が見ても試合の判定が、れき然とするような技術を審判しなければ、剣道の大衆化は困難であろう。又本来、ある特定の技術は相手の如何なる打突があっても、特意技術として生きねばならない。例えば返し面の技術は、相手が小手に打込むか、胴に打込むか、面に打

込むかを問わず、それらは凡て返えして（相手の打ち込んだ技術を）相手の面を打突する技術に変化する所に特異の技術性がある。

この特異技術が勝敗決定の大きな要素であって、この技術が試合の場に如何なる体制を構成するか、どのようにして出来るかは、同一人を連続統計する必要がある。又各部位に対しての打突は自ずと無理のない打突技術があると共に相手の攻撃技によっては自然の応じ技術がある事も発見出来た。そしてそれらの条件や要素が重なり綜合された時、剣道の技術は統一完成の域に達するものであろう。而もその時には技術の奥にひそむ精神の形成となって内も外も、技術も精神もない無の境地が発見されるだろう。本調査はか様な目的のために第二步を進めたわけであるが要約して次の様な結論が出た。

1. 高段者になるにつれて勝敗の決定打数は減少している。無駄な打突がない。

2. しかけわざ、応じわざ共決定打突は面、小手、胴の順であり、面技が特に高い。

3. 初心者、高段者を問わず決定打突の大部分がしかけわざであり応じわざは極めて僅少であるが、高段者になるにつれて比率は増加して順調に使用されている。

4. 先取された者は、体制ばん回のためにしかけわざが多いが低段位者ほど先取された場合体制の挽回はむずかしく、初心者はほとんど先取するか否かによって勝敗が決する。然し高段位者はしかけわざ、応じわざをコンスタントに使用している。

5. しかけわざの技術内容は勝敗の各類型に於て級内及び各級間の相関性が高く見られるが、応じわざでは類似点、相関性の発見が困難である。

6. 各類型における技術内容の変化は高校と一般にかなりの相関が見られる。

7. 各級内の技術内容の相関性は初心者から高段者に至る級内の相関性と一致している

8. 技術内容は打突の各部位によって多少異ってはいるが、一般的には飛込、出ばな、引き、抜き、返し、すりあげ、の順に低く、上段の如きは高段者に多く他の級にはほとんどない。

9. 高段者たるにつれて技術内容が豊富になる。

全我的統一を以って相手と共に一つの世界を創造する剣道試合の体制は、技術的に未熟な初心者は初心者なりに高段者と変わらぬ場の体制を構成しているが(7)、有形、無形が統一体として働き合う場の体制は、本調査に見られるように総合、分解、統一と体制の発展過程をくり返す。技術の高度の発達に伴って、技術内容は更に特定な特異わざとして又決定打は減少の方向にコンスタントに発展をくり返すが(1)、このことは同時に、例えば懸中侍、侍中懸として、有形的な技術の統一と共に、無形的な精神の統一として、即ち全我的統一の体制を構成するものと解されるであろう。この統一があつて、はじめて、千変万化、相手に応じて如何なる技術の変化も可能になる絶対境が絶対発見出来るものであろう。 (昭和38年9月4日受付)